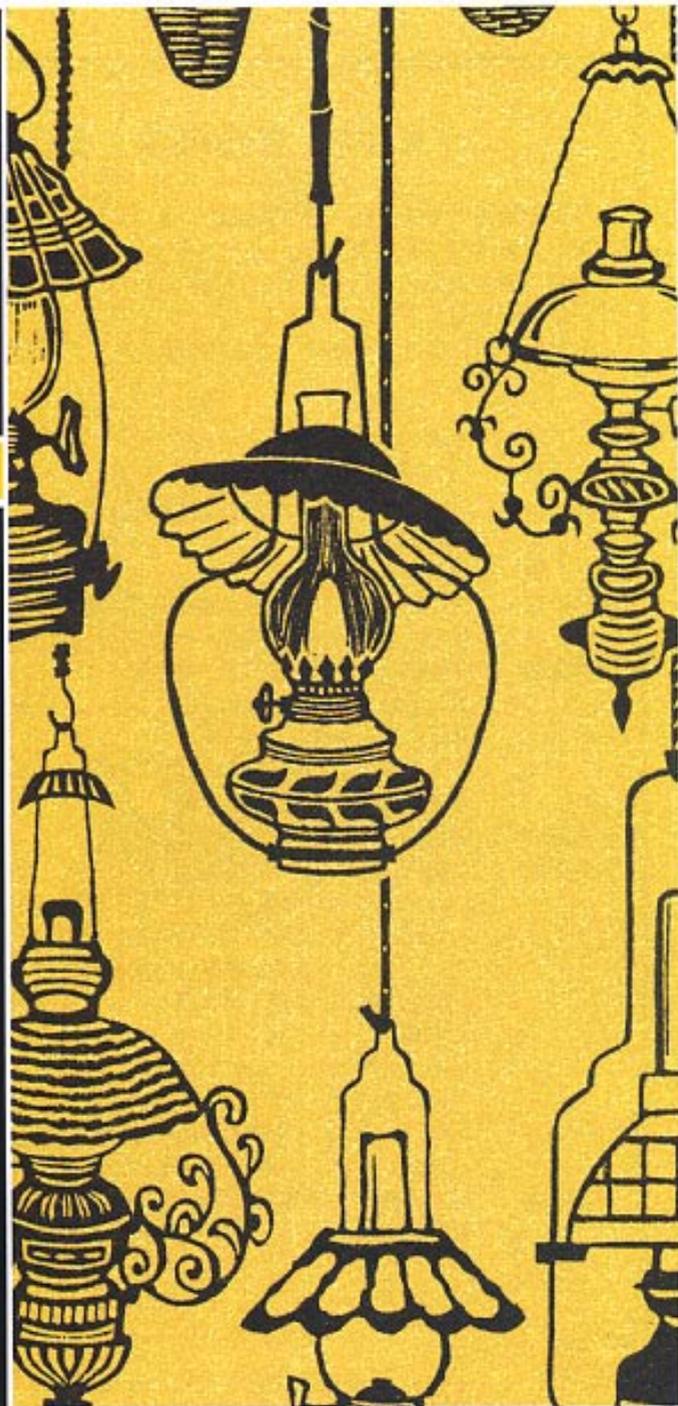


春燈

5
月号

MAY 2007



久保田万太郎の句

初場所やわすれは措かず信夫山

『近什壹百句』昭和三十六年文藝春秋三月号

俳句は余技なりと嘯いていた万太郎。その擲揄とは裏腹に彼はこの十七文字の短詩型に生命を賭けた。相撲好きで此処では長閑に句を詠み、遊びに徹した。疾風怒濤の寄り、投げ技の冴え、けれん味のない相撲でファンを魅了し尽くした信夫山。引退後の彼の去就を寡聞にして知らないが、万太郎のこの句を得たことで彼の土俵人生がより輝きを増したであろうことは確かである。

植田利一

久保田万太郎の句

新涼の身にそふ灯かげありにけり

句集『草の丈』昭和二十七年

大正十五年の作。『まつりのあとのさびしさは』と前書がある。作者の移り住んだ近くは、日暮里諏訪神社があり、その祭礼を詠んだ三句中の一句。祭り好きの私には、新涼の清清しさが、膚に伝わってくる――。万太郎の俳句の生命とも言うべき「影あつての形」である。

以来、春燈の叙情に強く惹き付けられて、俳句の世界に興味を覚えたのは、昭和三十年の晩秋のこと。

小林のり人

西ヶ原日記 (三十)

鈴木榮子

夕ながし魚^か河岸^しに隣れる新聞社
春の咳^か^せへて舞台吉野山
方眼紙ノート縦横使ひ花見地図
立漕ぎて鉄鎖ふらここぎくしやくす
夭折の詩人木机小振りに春

夢二の字誰かに似てゐし花鎮め
お告祭聖画の聖女愛全幅
さくら季染井桜といふ銘酒
鳥雲に編隊といふ組ぐみ形かたち
涅槃寺古き町にて行き合はず
制服はプレタポルテの新社員
恋猫の雄猫とわれを等分に

冬そして春

中野さき江

鉄路一閃枯野の不安貫けり
狂ひ花仏意に背き通しけり
冴返る意に添はぬ皿真つぷたつ
鉄骨の積み晒されて斑雪
灯明の幽かも揺れず春の闇
木の芽和へ職の自説を曲げずけり
葬終へて昏るる坂みち遠ざくら
押し黙る気まづさ救ふ春の風
解体のビルの妖気や月おぼろ
土に還る花屑の嵩雨の墓地

雛

成田なな女

三月や恋路が浜のうつせ貝
琴引きの松の奏づる弥生かな
田螺和へ胸の奥処に父母棲みて
一心に生きて春田を打ちにけり
中馬街道六千体の雛祭る
囃し雛腰を捻りて鼓打つ
鉞の欠けたる金時土雛
三河武士たましひ此所に雛祭る
裏山に剪りしばかりの竹雛
掌の上になにやらぬくきおぼこ雛

当月集

鈴木 榮子選



○ 佐々木 新

末黒野や水郷巡る手漕舟

百夜通ひ唐棣はなすの梅は未だなる

暁紅や海苔粗朶黒きアラベスク

海苔搔き女攪網より海を滴らし

この辺り風の辻つじや木の芽の香

○ 横田 初美

さまざまな音を楽しむ朝寝かな

洗ふ菜の筴をしたたる水も春

あたたかや藻の屑浮きし忘れ潮

夕厨浅蜷いまはの息を吐き

一輪つつ殖え春蘭の三年かな

○ 伊藤 百江

電子辞書便利で不便半仙戯

手作りの雛を飾り子のあらず

生家売りたること悔いつ納税期

御下賜雛見むと通さる奥座敷角館安藤家

小児科医院受付の紙雛

○ 上野 進

さなきだに故郷恋し竜の玉

建国祭神話の文庫本買ひぬ

へとへとの猫と行き交ふ探梅行

引き鴨の臨時総会開催中

冴返り音の尖れる早瀬かな

○ 君塚 敦二

腕振つて歩く休日梅の花

傘を打つ雨音楽し春の雨

受験子の机に向かふ根気あり

鴨の落としてゆきし椿かな

春愁や世に嫌はるる苺のみ

春燈の句

鈴木 榮子選



熾る野火漢の影を走らす

千葉 中嶋 昌子

野を焼いて朝の雨を呼びにけり

初耳の母の初恋ひな飾る

春耕の二人少しく距離を置き

七光に七つの影や春愁

涅槃図の末座最も慈悲深し

遠まはり紅梅の香の清ければ

啓蟄や依佐地の虫も這ひ出づる

バンコク 大口 憧遊

老蛇の穴出でてより迷ひをり

大島に向き合ふ座敷白魚枕

うかうかと肥えて恥らふ春の月

野遊びや湯立て神事に会ふことも

春の闇母の遣せる歌稿かな

草木染の行程たどる遅日かな

一途てふことの哀れや恋の猫

埼玉 鈴木 撫足

老梅の疎らかな花の矜恃かな

民宿の小さき窓下石路の花

空の色少しにごらせ薄紅梅

新暦生涯行けぬスイスの絵

そよと吹く風ものの芽の息吹かな

マスクして足早少女の眼千両

アガサ・クリステイの最終章や冴返る

神奈川 河本由紀子

かまびすし父似母似と春立てり

貫通の雪山隧道地虫出づ

台北 范 友佳女

千葉 竹内 慶子

台北 林 雪江

余言

鈴木 榮子

百夜通ひ唐棣はねずの梅は未だなる

佐々木 新

唐棣は万葉集の中で詠まれていたそうだが、この言葉自体は庭の梅、木蓮、庭梅の古名とすると広辞苑にあった。しかし百夜通ひが分らないと完全なる鑑賞は出来ない。

百夜通ひは古来、恋する男性（深草の少将）が思い人の許に意が通ずるまで百夜も通ひつづけることを言うのである。掲句は、唐棣の梅が思い人に転換されているのだ。作者は唐棣の梅をどこかで見受け、異常な関心を抱いたのだ。なんとかして咲く花を見たいと、今日も明日もと通つたのだが、なかなか思いが遂げられない。それを百夜通ひの恋する男性に転換して面白く詠い上げたのである。この比喩なかなか面白い。

夕厨浅蜷はいまはの息を吐き

横田 初美

石垣りんさんの詩の代表作にもあるが、浅蜷は主婦が厨で見える身近な生き身の貝である。

作者の手順として、調理寸前まで来てしまった浅蜷へ俳人主婦が眼にした命である。

愛すべき浅蜷のいまわの際に細く貝を空けてふつと息をはく貝。胸をつかれたが手は夕餉の仕度を進めて行く。

いまわの際—という生きものの最後のため息を知った作者の心のため息が即、句になった。

引き鴨の臨時総会開催中

上野 進

引鴨は帰雁より俳諧的で身近に詠まれやすい。

三月から五月にかけて北へ帰ってゆく。その鴨達がある日池に沢山集まっている。普段はそれぞれ好きに泳いでいる鴨の見事な集団である。ああもう引き鴨の頃と思うと、季節の移りゆくことに気づかされた。

それがことに今日は大挙してこの池に集まり、なにか指示でも待つているのか。仲間達や一家眷族と引揚げの北帰行準備のようだ。

この頃人間の社会でも企業や団体の総会があるので、彼等をなぞらえたのが一寸おもしろい。